

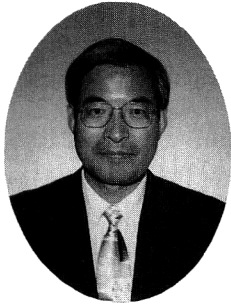
日本光学会 平成 10 年度年次報告

1. 総 括

日本光学会幹事長 山口 一郎

(1) 活動方針と出版

日本光学会が前身の光学懇話会(1952年設立)から名称を改めて今年でちょうど10年になる。本年4月末の会員数はA会員792名、B会員1179名で計1,971名、特別会員160口となっている。多くの学協会の中でも特に広い学問分野



を包含する応用物理学会の最大の分科会として、光に関連する科学と工学を中心に据えて、学会誌の発行、講演会や講習会の開催、研究グループ活動などにより学術の研鑽と啓蒙を行ってきた。

出版については後で詳しい報告があるので簡単に述べる。昨年度からA4に大判化した月刊の機関誌「光学」は、光のさまざまな先端分野を特集で取り上げ、原著論文も掲載している。英文論文誌OPTICAL REVIEWは発刊後5年を迎えた。昨年はインパクト指数においても光学の国際誌に比肩できる評価も与えられた。今年度からJJAPにそろえて特別会員購読制度が施行されるとともに、同じ印刷所を使うことになった。そして印刷経費が大幅に削減された。また応用物理学会からの要請に応じて、昨年度11月から物理学関連学術誌電子化出版協議会に参加し、Journal of Physical Society of Japan, Progress of Theoretical Physics, JJAPの関係委員とともに、欧米で現在めざましく進展している電子化出版問題への対応と協力関係を検討した。これらの新たな状況をひとつのきっかけにしてOPTICAL REVIEWのスコープをさらに広げることにより、日本と太平洋諸国における光分野の論文を集約する雑誌へと発展することを希望している。

(2) 講演会と講習会

第24回冬期講習会「光ファイバ通信の基礎と最先端一チュートリアルコース」が98年1月22、23日に東大生研で開催された。参加者は81名であった。

光学素子の設計・製作・評価に関する発表を中心とする光学シンポジウムは6月25、26日東大生研で開催され、演

題30件、参加者322名を集めた。光ディスクの光学系に関する特別セッションが特に好評であった。

第32回サマー・セミナーを8月20～22日に「光科学と光工学の過去・現在・未来」の題で4年間の休止を破って開催した。会場は、過去の大半のサマーセミナーに使われ、5年ぶりとなった長野県下諏訪町の山王閣であった。レーザー、ホログラフィーの歴史と基礎、近接場、光ファイバー、X線光学、短パルスレーザーについて基礎と最近の動向を勉強した。聴講者は準備期間が短かったため35名で、学生が12名であった。若い会員にとって良い刺激となったことを期待している。

応用物理学会講演会では春に限られているA会員の原著論文の発表の機会を秋にも与え、他学会からも光に関連する発表を広く集めようとの趣旨で92年に始められたOptics Japan '98は、広島大学での応用物理学会の最終日の9月18日と翌日に岡山理科大で開催された。2件の特別講演、1件の現地招待講演、2件の奨励賞講演、研究グループ企画の特別セッションなどを含む演題180件、参加者411名はこれまでの最高であった。しかしここに至ってその位置づけ、応用物理学会での光分科とのすみわけ、セッション構成などに関して、日本光学会の独自性をいかに出していくかの課題とも関連する検討が必要となっている。

他の学会と共催の講演会では、第31回光学五学会関西支部連合講演会「色を感じる」(1月30日、大阪市大)に65名の参加者、カラーフォーラムJapan '98(11月10～12日、工学院大)に230名の参加があった。地区講演会では関西講演会「光計測における時空間の類似性と双対性」(11月19日、阪大、1件、出席52名)、名古屋講演会(12月14日、名城大、4件、出席175名)が開催された。

(3) 会員の表彰

「光学」またはOPTICAL REVIEWに掲載された原著論文の30歳未満の著者を対象とするのが光学奨励賞である。平成10年度は、コヒーレント後方散乱光の増強効果を解析した石井勝弘(北大電子科学研)と高出力安定化レーザーを開発した安井武志(計量研)に、Optics Japan '98の会場で授けられた。また40歳未満の会員を対象とする光学論文賞は1959年の創設から第41回になった。自薦・他薦計9件の応募の中から、尾藤洋一(計量研)がGaAs結晶を用いた空間変調器の開発に対して、また劉紀元(理研)が戻り光による半導体レーザー干渉計の縞ロックの発見と

解析に対して選ばれ、応用物理学会春季講演会（東京理科大）の日本光学会総会で受賞した。研究グループの中では近接場光学、光設計、微小光学、ホログラフィックディスプレイの各研究会がそれぞれ独自に表彰制度を設け、一部の授賞式は Optics Japan '98 の会場で行われた。

（４）国際協力

国際協力活動の重要性も増してきた。97年に締結された SPIE との協力協定にもとづき、OSA-SPIE-OSJ 合同名簿が9月に発行された。文書によるデータ依頼の結果ははかばかしくなかったが、インターネットを使ってからは急速に集まり、全会員の半数以上の1,090名が掲載された。冊子またはCD-ROMのいずれかが掲載会員に無料配布された。最初の試みであり、時間も限られていたため、このような結果になったが、次回の3年後にはこのデータをもとにさらに充実した名簿を発行したい。

研究グループが中心となって組織された国際会議が2つ開催された。レンズ設計国際会議（6月、東京）と第5回近接場光学国際会議（12月、南紀白浜）のいずれも大きな成功を収めた。

（５）本年度の活動計画

最後に本年度の活動計画を述べる。上述の SPIE との協定にもとづく 1st OSJ-SPIE Joint Conference として International Conference on Optical Engineering for Optical Sensing and Nanotechnology (ICOSN '99) が、6月16～18日にパシフィコ横浜で開催される。アブストラクトの締め切りは当初より1か月遅らせて98年10月末日とした。12月末に20か国から165件の論文が採択された。第40回光学測定機展にあわせてあるため、日本の光計測関連の現状を紹介する良い機会となろう。第24回光学シンポジウムは7月1,2日に東大生研で開催される。またサマーセミナーは、今年に応用物理学会の会期が9月初めであることを考慮して9月16～18日に軽井沢で開催され、テーマは「新しい映像と視覚の世界」である。Optics Japan '99は11月23～25日に大阪大学で予定されている。最新の成果の発表を広く他学会にも求めて応物講演会との違いを明確にしていきたいと考えている。

日本光学会の広報媒体として機関誌「光学」に会合予定や幹事会の議事録を洩れなく掲載するとともに、2年前に開設したホームページの充実を図り、講演会プログラムの掲示などに速報機能を生かした活用を図っていきたい。電子メールなどの新しい会員データや活動実績を掲載した会員名簿も8年ぶりに無料発行する予定である。

国際化への対応もさらに進めることを考えている。アメリカでは昨年来から光関連分野のひろがりに対処すべく

OSA と SPIE の合同が真剣に議論されている。日本においても光関係の研究者・技術者間の交流を一層活発にして連帯感を育てるべき時が到来したとも考えられる。そして近隣諸国との協力関係を推進する必要性がひととき高まっているとの認識を強くしている。

2. 編集集

「光学」

前編集委員長 伊東 一良

「光学」のサイズが去年の第27巻第1号からA4化され、1年余りが経過した。各編集委員や「光学」編集局のご努力のお陰で出版作業も安定し、新しい誌面もおおむね好感をもって受け入れられているように感じられる。特に若い方々を中心に編集されている「光の広場」も記事の内容が充実し、今後の展開が大いに期待されている。この欄は、会員からのフィードバックも念頭に置いて書かれており、会員諸兄からの率直なご意見を期待している。

原著論文（研究、研究速報、技術報告）の掲載数は、1993年から1998年までの6年間で順に、54, 44, 31, 33, 22, 25編と、OPTICAL REVIEWの影響などにより全体として減少傾向にあったが、去年はわずかながら上昇している。サイズのA4化と誌面の刷新の影響ではないかと考え、今後もこの傾向が持続することを期待している。しかし、去年は1月から4月までの4か月間に14編の原著論文の投稿があったが、本年は8編に過ぎない。本年度は「光学」の誌面刷新が一段落し、原著論文の投稿勧誘を見合わせたことが影響しているのかもしれない。電子メールその他の手段による投稿勧誘については、今後も検討の余地があると思われる。

「光学」第27巻では総合報告1編、解説46編、最近の技術から24編が出版された。去年がD. Gaborによるホログラフィーの誕生から50年目に当たるため、第5号では「ホログラフィー誕生50年」号が企画され、第一線の研究者によりホログラフィーのまきに過去と現在と未来が展望された。「光学」の大きな魅力のひとつは、この解説のレベルの高さにあると考えられる。今後とも、会員諸兄の「光学」解説ご執筆の際の最大限のご尽力に期待する次第である。

会員の皆さま方がこの報告をご覧になるときは、第28巻5号はすでにお手許に届いているはずであるが、この号は「光学」編集委員会がはじめてマルチメディア化に対応

して企画を行ったものである。すでに一部の会員は、記事に記載された URL を訪れて、記事に関連したカラー画像や動画をご覧いただき、記事の理解を深めていただいたものと思われる。この号を担当された編集委員と著者の方々の大変なご努力でこの号が出版されていることを、ここにお伝えしておきたい。著作権の扱い、特にネットワークに関連した著作権の扱いに、検討すべき点が残されていると思われるが、この新しい試みに対してぜひ会員各位のご意見をいただきたいと考えている。

急激かつ世界的な情報通信メディアの変化に、「光学」も無縁でいることはできない。特に最近進んでいる電子出版化、誌面のカラー化についても、編集委員会までご意見をいただけると幸いである。

「OPTICAL REVIEW」

編集委員長 朝倉 利光

1998 年も終わり、OPTICAL REVIEW は創刊から 5 年が経過した。日本光学会が責任をもって編集・発行する国際学術誌 OPTICAL REVIEW は、初代編集委員長伊藤良一氏（東大、現在は明治大学）のもとで順調に発展してきて今日に至っている。この新しい学術誌は、(1) 国際性(英文による記述)、(2) 高いレベルの論文の掲載、(3) サークュレーションのよさ、(4) 迅速な査読と出版など、大きな特色をもつことを目的としている。出版から日が浅いにもかかわらず、OPTICAL REVIEW はこれらの目的を徐々に達成しつつあり、国際的な学術誌としての位置が確立されてきている。これらの成果は、今までの伊藤氏の強力な尽力によるところ大であり、ここに改めて感謝の意を表したい。

1998 年度の OPTICAL REVIEW への投稿数は 91 編で、内訳は国内 80 編、海外 11 編、また掲載論文数は 71 編であった。特集の論文を除けば、毎年の投稿論文数と掲載論文数は平均して約 95 編と 75 編であり、それに比較して少々減少したことは誠に残念である。本誌の発展には、投稿論文数とそれに比例した掲載論文数の増加が必要不可欠である。今までの投稿者の内訳は、日本光学会会員がほぼ 80% を占めており、会員以外からの投稿が非常に少ない。また、投稿者の所属機関別では、大学が 68%、企業が 25%、研究所他が 7% である。海外からの投稿数は 10 数件あり、増加の傾向が見られる。

分野別投稿の内訳は、多い順に Information Optics (23 編)、Optical Systems and Technologies (18)、Nonlinear Optics (10)、Photonics and Optoelectronics (9)、Lasers

(9)、Environmental, Biological and Space Optics (6)、General and Physical Optics (4)、Quantum Optics and Spectroscopy (4)、Vision (4)、Optical Materials and Manufacturing Technologies (2)、others (2) であった。投稿の少ない分野に対して積極的に投稿を呼びかけ、できるだけ幅広い分野にわたって掲載することが必要であろう。

OPTICAL REVIEW に関する投稿勧誘および講読勧誘としては、国内外で開催された光関連の講演会、国際会議などでのパンフレットの展示および配布による宣伝活動、および講演者リストなどから直接本人宛へのメールによる投稿勧誘を行ってきた。また、宣伝活動としてインターネットにホームページを開設し、各号の内容とアブストラクトを掲載し、常に情報の鮮度を保つことに努めてきた。ホームページ開設以来、アクセス数は 20 万件に達しており、特に海外からのアクセス数が全体の約 40% を占めている。さらに、OPTICAL REVIEW の海外への配布は、1998 年からドイツの Springer Verlag 社を通して行っており、この措置ですでに購読者が出ており、今後はますます海外サーキュレーションが大きく展開されることが期待される。

1999 年 1 月より、本誌の印刷所を大昭和印刷から小宮山印刷に変更した。編集は従来通り学会事務センター、印刷は小宮山印刷の分担となり、出版事業が明確になった。また、機関講読制度を廃止し、今後は各機関に特別会員として講読していただく特別会員制度に変更した。

3. 研究グループの活動

(1) 位相共役・光波ミキシング研究グループ

本年度は研究会を 3 回開催した。第 45 回応物関係連合講演会インフォーマルミーティング (3 月 30 日 (月)、東京工科大学、講師：M. J. Damzen, 参加者：20 名)。1998 年第 1 回位相共役・光波ミキシング講演会 (7 月 3 日 (金)、東大生研、講師：V. V. Spirin, Alexei Kamshilin, 参加者：30 名)。第 59 回応物学術講演会分科内総合講演 (9 月 15 日 (火)、広島大学、テーマ：Photorefractivity in cubic materials, 講師：S. G. Odoulov, Alexei Kamshilin, 参加者：100 名)。

(2) イメージサイエンス研究グループ

- Optics Japan '98 スペシャルセッション「バイオメディカル・オプティクス&イメージング」の開催 (招待講演 4 件+一般講演 19 件)。
- ISG newsletter 24 の発行。
- インターネット上での ISG FORUM による討論、情報

交換。

- ・春季・秋季インフォーマルミーティングの開催。
- ・会員数 182 名。

(3) 近接場光学研究グループ

今年度前半には第 7 回研究討論会を開催した(7 月, 名古屋大学)。参加者は 90 名, 発表件数 19 件であり前回までと同様の盛況であった。なお, 今年より, すぐれた発表に対し近接場光学賞を授与する制度を設け, 2 件が受賞した。後半には第 5 回近接場光学国際会議(12 月, 南紀白浜「コガノイベイホテル」)に関し, 大阪大学を中心とする当グループ幹事等が運営委員, 現地プログラム委員として参加することを主な活動とした。世界各国から参加者約 400 名, 発表件数約 300 件であった。これらの数字は過去の 2 倍以上であり, 近接場光学の急進展と光学における重要性を認識できた。

(4) コテンポラリーオプティクス研究グループ

第 7 回に引き続き, 第 8 回は光に関する最近の話題 II として, 1) フーリエ光学について黒田先生にチュートリアル的なお話をしていただいた。2) 「面白い光学実験」と題して光を用いた興味ある玩具等, 現物を見せていただいた。あっと驚くものがあり会場を一周し手に取って見ることができた。3) 色彩に関する研究は基礎から応用までのお話をお伺いした。アメリカ MIT を中心にその周辺のホログラフィーの最近の話題は, 冬学期のセミナー等, 誰でも参加できること等くわしいお話をお伺いした。懇親会ではお互いに今回の感想を述べ, 特に多くの大学院生, 学生の参加があり, 親しみやすさを感じたくさんのファックスをこの後もいただき, わかりやすさと親しみやすさが良かったと思う。

(5) 視覚研究グループ

応用物理学会講演会, Optics Japan の発表についてのテクニカルミーティングである 2 回の研究討論会, 国内および国外の研究者による特別講演会をそれぞれ 1 回を開催した。いずれも参加者は 30~45 名程度であり, これらの会の目的である十分な議論に適しており成果があった。

(6) 光コンピューティング研究グループ

光コンピューティング研究グループは会員数 133 名(12 月現在)で, 本年度は 4 回の研究会(2 月開催分を含む)と 4 号の機関誌(OPCOM NEWS)を発行した。第 82 回研究会は, 4 月 24 日に大阪市立大学で開催し, 参加者数は 47 名であった。第 83 回研究会は, 7 月 9~11 日に静岡県浜名荘で合宿形式で開催し, 参加者数は 37 名であった。第 43 回研究会は, 12 月 4 日に能開大で開催し, 参加者数は 28 名であった。本年度から, 研究会で予稿集を準備することに

した。

(7) 光設計研究グループ

本年度は研究会, シンポジウム等の企画, 国際会議の開催, 設計賞の授与と会誌の発行を行った。第 15 回研究会「偏光の基礎と光設計への応用」(2 月 13 日, 東大生研, 約 110 名)。第 45 回応用物理学関係連合講演会シンポジウム「光設計のニューウェーブ」の企画(3 月 28 日, 東京工科大学, 約 130 名)。Optics Japan '98 in 岡山「光設計スペシャルセッション—進化する光設計—」の企画(9 月 18 日, 岡山理科大学)。第 16 回研究会「光設計賞記念講演/非軸対称光学系」(12 月 3 日, 東大生研, 96 名)。International Workshop on Optics Design and Fabrication (ODF '98, Tokyo) 開催(6 月 15, 16 日, 東京ガーデンパレス, 133 名(海外 19))。第 1 回光設計賞(授賞式: 9 月 18 日, Optics Japan '98 会場にて)。会誌発行:「OPTICS DESIGN」No. 15, 16。

(8) 微小光学研究グループ

平成 10 年度は 4 回の微小光学研究会を開催し, その予稿集として Microoptics News Vol. 16, No. 1~4 を発行した。各研究会のテーマ・参加者は以下のとおり。

第 67 回研究会: 3 月 6 日(金), 東大生研, 「有機材料と微小光学」, 88 名。

第 68 回研究会: 7 月 2 日(木), ソニー会館, 「微小光学と新しいレーザー」, 112 名。

第 69 回研究会: 9 月 3 日(木), 東大生研, 「微小光学と画像表示・画像処理」, 75 名。

第 70 回記念研究会: 12 月 11 日(金), 東工大長津田, 「21 世紀に向けての光技術—光はどこまで, 微小光学でどこまで—」, 111 名。

(9) ホログラフィックディスプレイ研究グループ

研究会として, 第 1 回(5 月 29 日, 日本女子大, 参加者約 50 名, テーマ「ホログラムの光学素子への応用」), 第 2 回(8 月 28 日, 湘南工科大学, 参加者約 50 名, テーマ「コンピュータとホログラム技術」), 第 3 回(11 月 26 日, イメージ情報科学研究所, 参加者約 40 名), 第 4 回(3 月 5 日, 東工大長津田キャンパス, テーマ「ホログラフィ技術の展開に向けて」), 公募による講演会(11 月 6 日, 機械振興会館, 講演件数 9 件, 参加者約 40 名)を開催した。また, 研究会会報(HODIC Circular)の発行(4 回), 3 次元画像コンファレンスの協賛, HODIC 鈴木・岡田賞の選考および贈呈, 展示会開催, 海外のホログラフィー研究グループとの交流等の活動を行った。

4. 会 計

前予算担当会計幹事 山本 昌邦

平成10年度の決算状況を、予算と対比して報告いたします。平成10年度の予算は、平成9年度に行った会誌「光学」および「OPTICAL REVIEW」の印刷経費の見直しを盛り込んだ形で組まれました。

会誌「光学」では、予算に対し、決算は約400万円の差(赤字)が生じています。これは予算が12冊分の計上に対し、決算は14冊分の金額になっているためと、新しい料金体系での初めての予算であったため、多少の差がでたものと思われまふ。次年度以降で修正していきたいと考えています。1冊分の費用でみますと約90万円であり、2年前の実績約100万円に対し、A4版化を行ったにもかかわらず費用が削減されていることがわかります。

また会誌「OPTICAL REVIEW」では、ほぼ予算通りに収支決算が行われたと思います。印刷製本にかかっている金額が、飛躍的に軽減されています。

Optics Japan '98, 光学シンポジウム, 冬期講習会など,

研究会や講習会などの事業は、本年度も順調で収支も良好でありました。また、本年度はサマースクールも久方ぶりに開催しました。

その他、予算と決算で大きな差が生じているのは、会費収入と補助金支出のところでは、会費収入は、予算の段階で1割程度低めで計上しています。それがそのまま約200万円の差(黒字)となっています。また、補助金支出の差は約200万円(黒字)となっています。

全体としては予算と決算の差が相殺され、ほぼ予算通り約940万円の黒字を計上し、財政面での健全化が図られたと考えています。

平成11年度では、一部会員区分の変更をお願いしています。従来の機関購読を廃止し、特別会員への移行を行います。また、賛助会員が会誌「OPTICAL REVIEW」を購入できるようにしました。

また、従来の研究会や講習会の開催の他に、SPIEとの共催による国際学会(ICOSN '99)の開催、インターネットにおける光学会のホームページの拡充、新規会員名簿の作成、会誌のカラー化等、魅力ある光学会の運営が考えられています。会員各位殿の一層のご支援をこれからもよろしくお願いいたします。

平成 10 年度事業報告／平成 11 年度事業計画

	平成 10 年度事業報告(平成 10 年 1 月 1 日～12 月 31 日)	平成 11 年度事業計画(平成 11 年 1 月 1 日～12 月 31 日)
1. 会誌の発行	「光学」 Vol. 27, No. 1～12	「光学」 Vol. 28, No. 1～12
2. 欧文誌の発行	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 5, No. 1～6	「OPTICAL REVIEW」 Vol. 6, No. 1～6
3. 光学論文賞, 日本光学会 奨励賞の授 賞	光学論文賞 ・尾藤 洋一(計量研究所光学計測研究室) ・劉 紀元(理化学研究所光工学研究室) 日本光学会奨励賞 ・石井 勝弘(北海道大学電子科学研究所) ・安井 武史(計量研究所光学計測研究室)	光学論文賞 日本光学会奨励賞
4. 講演会, 講習会	第 24 回冬期講習会「光ファイバ 1 月 22～23 日 通信の基礎と最先端－チュートリ 81 名 アルコース」 第 31 回光学五学会関西支部連合 1 月 30 日 講演会「色を感じる」 65 名 第 23 回光学シンポジウム「光学 6 月 25～26 日 系および光学素子の設計, 製作, 評 27 件 価を中心にして」 322 名 第 32 回サマーセミナー「光科学 8 月 20～22 日 と光工学の過去・現在・未来」 35 名 Optics Japan '98 9 月 18～19 日 (岡山, 岡山理科大) 183 件 411 名 カラーフォーラム Japan '98 11 月 10～12 日 230 名 平成 10 年度関西講演会「光計 11 月 19 日 測における時空間の類似性と双 52 名 対性」 平成 10 年度名古屋講演会 12 月 14 日 180 名	第 25 回冬期講習会「光工学にお 1 月 12～13 日 ける多波長活用技術－光源からシ ステムまで－」 第 32 回光学五学会関西支部連合 4 月 講演会 ICOSN '99 6 月 16～18 日 第 24 回光学シンポジウム「光学 7 月 1～2 日 系および光学素子の設計, 製作, 評 価を中心にして」 第 33 回サマーセミナー 9 月 Optics Japan '99 11 月 23～24 日 (大阪, 大阪大学) カラーフォーラム Japan '99 11 月 平成 11 年度関西講演会 11 月 平成 11 年度名古屋講演会 12 月
5. 研究グルー プ	イメージサイエンス, 位相共役・光波ミキシング, コンテナラリーオブティックス, 近接場光学, 視覚, 光コンピューティング, 光設計, ホログラフ ィックディスプレイ, 微小光学	イメージサイエンス, 位相共役・光波ミキシング, コ ンテナラリーオブティックス, 近接場光学, 視覚, 光コンピューティング, 光設計, 生体医用光学, ホロ グラフィックディスプレイ, 微小光学
6. 幹事会, 委員会	幹事会 3 回 常任幹事会 3 回 「光学」編集委員会 6 回 光科学及び光技術調査委員会 5 回 光科学及び光技術調査委員会(関西) 3 回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1 回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 2 回	幹事会 3 回 常任幹事会 3 回 「光学」編集委員会 6 回 光科学及び光技術調査委員会 5 回 光科学及び光技術調査委員会(関西) 3 回 「OPTICAL REVIEW」編集委員会 1 回 「OPTICAL REVIEW」出版委員会 1 回
7. 会員数	平成 10 年 12 月末日現在 (()内は昨年度) A 会員 784 名 (758 名) B 会員 1170 名 (1163 名) 特別会員 220 口 (178 口) 賛助会員 83 社 143 口 (94 社 155 口)	

平成 10 年度収支決算

平成 10 年 1 月 1 日～12 月 31 日

<収入の部>

大 科 目	中 科 目	金 額	内 容 (金額記入)
会 費 収 入		21,121,000	
	会 費 収 入	21,121,000	
事 業 収 入		27,833,721	
	講習会, 講演会収入	7,539,500	サマーセミナー 1,348,000/冬期講習会 1,481,000/Optics Japan 3,022,500/その他 (光学シンポジウム) 1,688,000
	会誌出版事業収入 「光 学」	8,201,650	別刷代収入 2,512,650/広告料収入 5,649,000/懇親会費 40,000
	会誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	11,092,571	別刷代収入 7,289,821/購読料 2,452,750/科研費補助金収入 1,350,000
	その 他 事 業 収 入	1,000,000	一般会計寄付金
雑 収 入		806,070	
	受 取 利 息	38,969	
	雑 収 入	767,101	バックナンバー, 資料コピー代
引 当 金 戻 入		287,290	
	回収不能引当金戻入	287,290	
繰 入 金 収 入		13,644,695	
	分科会賛助会費還元金	4,896,000	40,000×80%×153 口
	分科会 給 与 補 助	8,748,695	学会担当者分
当 期 収 入 合 計		63,692,776	
前 記 繰 越 収 支 差 額		38,470,243	
収 入 合 計		102,163,019	

<支出の部>

大 科 目	中 科 目	金 額	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		5,778,735	
	臨 時 雇 賃 金	648,000	サマーセミナー 28,000/冬期講習会 32,000/Optics Japan 556,000/その他 (光学シンポジウム) 32,000
	印 刷 製 本 費	1,776,834	サマーセミナー 134,820/冬期講習会 219,856/Optics Japan 1,115,205/その他 (光学シンポジウム) 306,953
	諸 経 費	3,353,901	会議費 0/116,340/140,260/225,948, 封筒代 0/0/0/4,950, 旅費交通費 1,020,064/0/232,600/33,780, 通信運搬費 5,000/4,430/75,460/48,750, 消耗品費 0/0/28,929/0, 賃借料 0/0/0/0, 諸謝金 368,749/394,574/44,444/111,732, 雑費 0/524/64,152/5,215, 懇親会費 0/0/428,000/0
会誌出版事業「光 学」		20,501,728	
	印 刷 製 本 費	10,278,996	組版代 3,654,210/製版代 968,516/刷版代 422,100/印刷代 1,602,300/製本代 750,960/別刷印刷代 687,649/用紙代 2,115,167/一般印刷製本費 72,844/広告印刷費 5,250
	郵 送 費	2,789,387	
	諸 経 費	7,433,345	会議費 109,595/編集委旅費交通費 1,094,620/その他旅費交通費 227,110/通信運搬費 496,933/消耗品費 45,770/賃借料 44,480/臨時雇賃金 12,512/業務委託費 5,340,160/諸謝金 38,885/雑費 23,280
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		11,380,450	
	印 刷 製 本 費	5,839,975	組版代 2,475,900/製版代 624,590/刷版代 221,550/印刷代 564,900/製本代 420,210/別刷印刷代 504,324/用紙代 1,001,504/一般印刷製本費 26,997/広告印刷費 0
	郵 送 費	1,267,503	
	諸 経 費	4,272,972	会議費 30,000/その他旅費交通費 83,820/通信運搬費 571,617/消耗品費 5,460/賃借料 0/臨時雇賃金 0/業務委託費 2,770,880/諸謝金 0/雑費 0/英文校閲料 443,275/ホームページ作成費 367,920
その 他 事 業 費		2,342,090	
	助 成 金 支 出	1,853,990	
	補 助 金 支 出	100,000	
	名 簿 作 成 費	0	
	諸 経 費	388,100	一般印刷製本費 272,475/その他旅費交通費 28,500/賃借料 18,900/通信運搬費 37,130/会議費 22,598/雑費 8,497
管理費 (含 幹事会)		12,184,214	
	給 与 手 当	8,748,695	学会担当者負担
	一 般 印 刷 製 本 費	35,796	諸印刷代, 資料コピー代
	ホ ー ム ペ ー ジ 製 作 費	15,000	
	諸 経 費	2,632,953	臨時雇賃金 133,525/会議費 129,052/その他旅費交通費 1,003,440/消耗品費 14,834/賃借料 93,000/通信運搬費 792,569/諸謝金 0/雑費 166,615/租税公課 255,042/振替手数料 16,370/製本代 22,050/封筒代 6,456
	回収不能引当金	751,770	
繰 入 金 支 出		2,112,480	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,112,480	事務手数料
予 備 費		0	
当 期 支 出 合 計		54,299,697	
当 期 収 支 差 額		9,393,079	
次 期 繰 越 収 支 差 額		47,863,322	

平成 11 年度収支予算

〈収入の部〉

平成 11 年 1 月 1 日～12 月 31 日

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
会費収入		22,568,000	
	会費収入	22,568,000	A, B 会員 1755 名×9600, 学生会員 45 名×6000, 特別会員 A 150 社×15000, 特別会員 B 100 社×30000, 特別会員 C 5 社×40000
事業収入		37,221,000	
	講習会, 講演会収入	20,027,000	サマーセミナー 3,235,000, 冬期講習会 1,330,000, Optics Japan 2,425,000, 光学シンポジウム 1,187,000, 国際学会 11,850,000
	会誌出版事業収入 「光 学」	8,500,000	別刷代収入 2,500,000, 広告料収入 6,000,000
	会誌出版事業収入 「OPTICAL REVIEW」	8,694,000	投稿料収入 6,480,000, 別刷代収入 864,000, 科研費 1,350,000
	その他事業収入	0	一般会計寄付金
雑収入		373,000	
	受取利息	73,000	
	雑収入	300,000	バックナンバー, 資料コピー代
引当金戻入		0	
	回収不能引当金戻入	0	
繰入金収入		13,930,000	
	分科会賛助会費還元金	4,704,000	40,000×80%×147 口
	分科会給与補助	9,226,000	学会担当者分
当期収入合計		74,092,000	
前記繰越収支差額		47,929,000	
収入合計		122,021,000	

〈支出の部〉

大科目	中科目	金額	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		18,814,000	
	臨時雇賃金	1,740,000	サマーセミナー 50,000, 冬期講習会 28,000, Optics Japan 630,000, 光学シンポジウム 32,000, 国際学会 1,000,000, その他 0
	印刷製本費	4,200,000	サマーセミナー 370,000, 冬期講習会 230,000, Optics Japan 500,000, 光学シンポジウム 300,000, 国際学会 2,800,000, その他 0
	諸経費	12,874,000	会議費 100,000/92,000/560,000/230,000/4,100,000/0, 費交通費 1,877,000/50,000/90,000/15,000/300,000/0, 通信運搬費 60,000/20,000/100,000/50,000/1,500,000/0, 消耗品費 10,000/6,000/100,000/10,000/200,000/0, 賃借料 0/0/90,000/0/1,000,000/0, 諸謝金 550,000/527,000/40,000/175,000/500,000/0, 雑費 1,000/1,000/150,000/10,000/200,000/0, その他 160,000
会誌出版事業「光 学」		17,110,000	
	印刷製本費	7,200,000	
	発送通信費	2,822,000	
	諸経費	7,088,000	会議費 90,000, 旅費交通費 1,070,000, 通信運搬費 330,000, 消耗品費 50,000, 賃借料 0, 編集委託費 4,560,000, 諸謝金 938,000, 雑費 50,000
会誌出版事業「OPTICAL REVIEW」		9,657,000	
	印刷製本費	5,400,000	
	発送通信費	1,472,000	
	諸経費	2,785,000	会議費 60,000, 旅費交通費 150,000, 通信運搬費 215,000, 消耗品費 0, 臨時雇賃金 0, 賃借料 40,000, 編集委託費 2,280,000, 雑費 0, 英文校閲料 40,000
その他事業費		1,610,000	
	助成金支出	1,610,000	関係先補助金等, 研究グループ
国際協力支援金		3,000,000	
管理費(含 幹事会)		12,946,000	
	給与手当	9,226,000	学会担当者負担
	印刷製本費	150,000	諸印刷代, 資料コピー代
	賃借料	50,000	
	諸経費	2,770,000	臨時雇賃金 50,000, 会議費 100,000, 旅費交通費 750,000, 消耗品費 50,000, 通信運搬費 350,000, 諸謝金 0, 雑費 200,000, 消費税 220,000, 振替手数料 50,000, ホームページ費 1,000,000
	回収不能引当金	750,000	
繰入金支出		2,087,000	(他会計への支出額)
	学会事務費	2,087,000	事務手数料
予備費		100,000	
当期支出合計		65,324,000	
当期収支差額		8,768,000	
次期繰越収支差額		56,697,000	